

受け身の上司は いない

働き方 innovation

中西金属工業の管理職改革

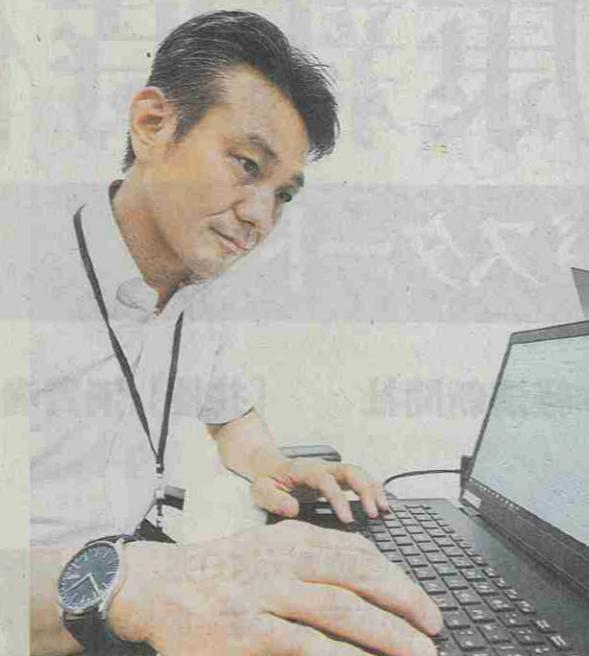
- 4月 原則在宅勤務に。日報提出を義務付け
- 6月 専任の改革担当が全管理職と面談。自ら仕事を創るよう促す
- 7月 全管理職が「役割シート」提出。具体的な使命や役割、役割から期待される成果と目標、テレワーク時の課題を記入。外部人材コンサルタントが個別に評価し、管理職にフィードバック
- 8月 2回目の面談。役割と業務内容を①将来につながる仕事②現状必要な仕事③不要な仕事に仕分け
- 10月 以降 3回目の面談。役割と業務内容を精査し、当該ポストの必要性を吟味

ポスト削減も含む人事制度改革を実行

日報と役割シートの記入例

BADな日報	GOODな日報
■メール確認(3時間)	■A社の案件についてBさんに助言(1時間)
■会議出席(2時間)	■C社とオンライン商談(1時間)
■部下Dさんに電話(30分)	■中古マンション市場の動向調査(2時間)
■社内事務(1時間)	■営業経費の支払い承認(30分)

BADな役割	GOODな役割
■グループの統括	■部署メンバーの業務確認と助言
■他部署との調整	■デジタル部門とRPA導入の検討交渉
■部署の中長期戦略作成	■電気自動車の市場動向と必要部品のリサーチ



部下の日報に目を通す村野大輔さん（大阪市の中西金属工業）

「自己の役割ランクに応じた具体的な『役割』と『業務内容』を明記し、提出願います」。中堅機械メーカーの中西金属工業（大阪市）は7月中旬、全管理職約150人に通達した。管理職の役割を改めて自己分析してもらう狙いだ。

きっかけは緊急避難的に始めたテレワークだった。

新型コロナ感染拡大に伴い4月2日から、生産現場を除き原則在宅勤務に切り替えた。同社は1924年（大正13年）創業で年間売上高約800億円、社員約4500人。育児目的の在宅勤務は認めていたが、ほぼ全社員が初のテレワーク。まずは日報提出と部署内での共有を義務付けた。

日報を基に上司が部下に適切な助言をできれば。そ

んな思惑だった。ところがむしろ管理職の課題が明らかになつた。例えばある管理職は「午前メール処理、午後資料作成」と書いた。

実際に何をしているのか分からない。中西章雄社長は「2割は部下への指示・助言も不十分で役割を果たしていないかった」と漏らす。

出勤していれば部下の様子は目に入る。誰かしらが相談や報告にやってくるし会議も多い。主体的に動かなくとも一日が終わる。受け身の姿勢が染みついた管理職は、テレワーク環境で機能停止していた。

あなたの役割は何なのか。会社の問い合わせは管理職に気付きを与えた。経営企画部デジタルソリューショングループ長（55）は「次世代ループ長（55）は「次世代

進む管理職改革、降格も

内閣府の調査では、テレワークで生産性が落ちたとの回答が約半数を占めた。一因は上司と部下のコミュニケーション不足だ。

アデコが管理職と一般社員を対象に7月実施した調査によると、テレワークでのコミュニケーションが減ったとの回答が約4割に上った。具体的な課題（複数回答）は「チーム間でのコミュニケーション不足33%、「部下とのコミ

ム市場は今後どうなるのか。築年数25年以上の中古マンションが増えるから、そこを攻略しよう」「進むべき方向を示して部下を導くことが求められると強く思った」

改革せざるを得ない理由がある。同社は自動車メーカーが主たる顧客だ。だが自動車は動力源がエンジンからモーターに切り替わり、必要な部品もガラリと変わる。中西社長は「今までと同じ発想、同じやり方では会社の存続が危ない。コロナはきっかけ。降格もためらわず、管理職を変えていく」と力説する。

（編集委員 石塚由紀夫）

「在宅」で問われる指導力

できる上司とできない上司——。テレワークの広がりは、管理職の優劣も浮き彫りにした。リモートでも仕事を適切に割り振った管理職がいる一方、目の前に部下のいない状況に戸惑い業務が滞つた人もいた。新型コロナウイルス後にうんだ管理職改革が広がっている。

「部下の仕事ぶりが分からぬ」22%など。部下側も「上司とのコミュニケーション不足」31%、「さぼっていると思われないか」28%など、上司と部下双方の不満がうかがえる。

こうした課題をどうえ、管理職改革に乗り出す企業は広がっている。SOMP（ホテルディングス）は6月～10月に全部課長約100人を対象にオンラインコールング研修を実施中だ。1回90分の実践講座を計6回受講する。

コロナ禍で全社員が原則在宅勤務に。コロナ後も場所にとらわれない働き方を選べると決めた。「直接会っていたらすぐ手を貸した。テレワークだとできないのにした。「最初は不安だったが部下はむしろ成長した」。人を育てるコツに近づけた気がする。

リフォーム営業部グループ長の村野大輔さん（45）は「将来ビジョンをチームに達成させること」を役割にした。「営業は自先の売り上げに追われる。コロナ以前の私もそうだった」だがコロナ禍で通常の営業活動が止まり、部署を取り巻く状況を冷静に分析する時間が取れた。リフォーム市場は今後どうなるのか。築年数25年以上の中古マンションが増えるから、そこを攻略しよう」「進むべき方向を示して部下を導くことが求められると強く思った」

改革せざるを得ない理由がある。同社は自動車メーカーが主たる顧客だ。だが自動車は動力源がエンジンからモーターに切り替わり、必要な部品もガラリと変わる。中西社長は「今までと同じ発想、同じやり方では会社の存続が危ない。コロナはきっかけ。降格もためらわず、管理職を変えていく」と力説する。